



宮 城 県 現代俳句協会 N E W S

2025. 10 No.52



海

菊池 修市
(青岬・牧)

高校を卒業するまでの十八年間、気仙沼大島で過ごしていた。なので、ずっと海が近くにあった。祖父は海苔養殖に従事し、父は遠洋漁業の船員をした後、わかめ養殖の仕事に就いた。海は、私たち家族の生きる糧であった。海は感謝する対象ではあるが、当然のことながら自然の厳しさを教えてくれる学習の場でもあった。

幼少の頃は、海は大好きな遊び場であった。寒く厳しい冬が過ぎ、春を迎えると潮干狩りの季節になる。四月後半から五月の上旬あたりが大潮の時期にあたり、潮干狩りに適した季節になる。親潮が流れる三陸沿岸の海は、ゴールデンウィークの頃であっても海水温はまだ低い。また、島で潮干狩りのできる浜は完全に干上がるわけではなかったので、冷たい海に手をつ込んでアサリを採った。夢中になって長靴に海水が入ってしまうと、その後は冷たさと戦いながらの潮干狩りだった。夏は海水浴に出かけた。私の小学生時代は各地区に遊泳できる浜が開かれていた。保護者が交代で監視を行い、子どもたちは上級生に見守られながら海で遊んだ。ところで、そのような環境にいれば誰でも泳げるようになると思われるかもしれないが、島にも泳ぎが得意でない子（いわゆるカナヅチ）はいる。泳ぎを教えてくれるとは限らないからである。実際私もきちんと泳げるようになったのは、大学生になってからである。夏が終わると釣りが一番の遊びになった。鯖はよく釣れて、持ったのは、大学生になってからである。夏が終わると釣りが一番の遊びになった。鯖はよく釣れて、持って帰ると母が喜んでくれた。しかし、船釣りは苦手だった。理由はもちろん船酔いをするからである。父は克服させようと何度か連れ去ったが、終いには諦めた。高校時代は船で通学した。内湾を走る客船なので船酔いすることはなかったが、夜、布団に入ると体が揺れているように感じられ、落ち着かなかったことを覚えている。

海への意識が変わったのは、やはり東日本大震災での津波である。それまで海は私たちに自然の豊かさを与えてくれる感謝の対象ではなかった。しかし、時として牙をむくことがあるということを知り始める機会となった。そうではあるが、海は私にとって「ふるさと」であることに違いはない。海を怒ることはどうしてもできないのだ。

帆船や春の鷗と冲向かふ

修市



シリーズ多羅葉

美貌の猫

島田静子

黄落のテラス看板猫を見に
夾竹桃整然とあり華族の内
境内を風吹き抜けし走馬灯
パチパチとどんと火の粉空に舞ふ
子等の居ぬ浜屋顔の海波ばかり
晩夏光風が消しゆく砂の城
聖五月美貌の猫を愛しけり
湯豆腐やつゆしたたらす箸の先
家づとは今朝ゆで上げし白子干し
高畑や街を歩けばワインの香
みちのく海盛り上がる初鰹
酒は旨し魚も旨し初鰹
風も五月猫が飛びつく猫じやらし
猫じやらし最果ての海風ばかり
鯛や百年続く酒舗の軒
梅雨を画く師や大津絵の猫笑ふ
吾が爲に梅雨画きくれし師も遠く
緑陰に鼻黒き猫まかり出で
高層ビルの屋上たんぽぽ黄のをごり
初湯いま老の入れ墨輝やかす

大正14年3月21日生（100歳）。昭和
25年頃から40数年、永野孫柳（俳句
饗宴主宰）に師事。

一句一葉

テーマ：可笑しみ

小川 真理子（梟）

こんな火宅にようこそ彼岸花二寸

人生山河あり。生きていれればいいこともある、と達人が言う。
起きる、働く、食べる、寝るを無心で繰り返す。呪文のごとく繰り返す。
返す。するといくらかでも明日が来る。怒涛のようにやってくる。先
が見えない。へたりそうになる。達人に泣きを入れたくなる。そんな
或る日、やあ、という感じで彼岸花のつやつやとした芽が。

小野 道子（小熊座）

翼なら何枚もある夏燕

何気なく外を見ていた時、鳥が掠める様に飛んで行った。一
羽の鳥に翼が何枚もあるように感じた。と同時に何枚もの翼だ
けが飛んでいるような錯覚に襲われた。今の時期なら子燕もい
ると思い、夏燕とした。句会にて、嘘を言うならこんな嘘を
との評を頂いた。

草野 志津久（小熊座）

屋顔やまごころ弁当生ぬるく

お昼に宅配弁当を頂いております。美味しくもあるけど生ぬるくも
あり、何とも言えない味わいですが、栄養バランスがよく、厚揚げを
味付けしたジージャー豆腐や鶏肉の山賊焼きといった自分では作らな
かった珍しいおかずがあるのが、楽しみです。そして何と言
つても主婦だった私にとって、毎日届くお弁当はありがたいものです。

黒河内 玉枝（小熊座）

ハイパーカミオカンデなんだか涼しそつ

カミオカンデについてテレビや新聞記事を読んでもニュートリノが
判らない。その上、今度はハイパーカミオカンデ。二〇二八年の実験
開始を目指して飛騨市に建設が予定されている。理解できたのは地
下千メートルにある水を蓄えた円筒のタンクと光センサーの実験装
置ということ。真夏日の中「なんだか涼しそつ」とつぶやいていた。

いつそのこと趣味にしちまへ草むしり

小関 桂子 (青岬)

先代の遺した庭の手入れだが、高齢の身には少々きつくなりつつある。朝夕の涼しい時間帯を狙って精を出しているが、当然汗だくで、蚊との戦いになる。それでも仕事上がりの庭を見ると、木々の根元に土が見え、清涼感に浸る喜びがある。そんな時ふと口をついで出た言葉を句にしてみた。

夜話の戊辰戦争なほ暑し

小村 寿子 (陸)

仙台と福島に居を構えてから、戊辰戦争の話を身近に聞くようになった。地元の人と酒が入ると郷土愛から話は熱を帯び、止まらない。高齢の男性同士がぼったり出会うと「お茶つこでも」と声をかける。夜お酒が入れば尚のこと。会津への愛はもつとヒートアップするのだ。

やあやあと玉葱の首下げて来る

小山 都 (青岬)

吊るされていたものなのでしょうか。玉葱の葉を束ねて歩いて来る人とすれ違いました。まるで戦に勝ち、武者の首をぶら下げて誇らしげにやって来るように見えました。知り合いへのお裾分けかもしれません。いただいた方も嬉しいですね。親戚のおじさんの顔を思い浮かべながら一句にしてみました。

戦なき世に存へて草の餅

日下 節子 (小熊座)

今年は第二次世界大戦終結から八十年、いわゆる「戦後八十年」である。私は当時五歳だった。戦争の怖さも、玉音放送に涙する父の悲しみも分からなかった。ただ黒い布が剥がされ部屋が明るくなったのが嬉しかった。それからの私は戦後をたつぷりと生きてしまったが、母の作ってくれた昭和の味の草餅だけが忘れられない。

一 句 一 葉

テーマ：可笑しみ

箱眼鏡海をちひさく見てをりぬ

菊地 美紀 (梟)

水平線の見える砂浜で殆んどの時間を過ごしていた故郷。ある時、穏やかな湾内を小舟に乗る機会を得た。初めて箱眼鏡を手渡されて湾沿いを廻りながら、覗き込んだ世界は強烈で、海原がきゅっと絞り込まれたような感覚の中、魚、海鼠、海胆、海草等の美しく、そして何と美味しそうに見えたことか。忘れ得ぬ体験でした。

炎帝のするりと抜けし針の穴

倉基 七三也 (滝)

全国的に猛暑日が続き、三十八度以上の熱中症警戒アラートを発令された都道府県も最多を更新。アラートの発令されていない地域でも、多くの地域で熱中症リスクが高くなっている。この酷暑はいつまで続くのか。いつまでも居座る炎帝にいい加減出て行つてほしいと、箒を逆様に立てかけても、出ていかないから困ったものである。

馬追に一献差し上げたく候

郡山 やゑ子 (小熊座)

秋の夜、亡き母と美味しいお酒をいただいていると、庭ですいつちよすいつちよと鳴き始めた。その声が清らかで美しく、お酒のつまみにもなった。「いつも鳴いているの」と母に聞くと「あなたが来たからよ」と言われた時に、天からすると降りてきた一句。
「馬追様、お礼に美味しいお酒などと一緒にいかがですか」

北限の椎の実拾い持て余す

川名 まこと (小熊座)

モノを捨てられない。もたえるモノはもう。貧乏性とはすなわち私だ。椎の実はいくらも拾ったのドンダリだが、山元町のそれが北限と聞くと何か特別に見えてきて、思わず拾わずにいられない。しかし、たかがドンダリである。あとは知るべし。自分を表現できているのが佳い俳句だとしたら、これほど佳い句はないのではないか。

夏季研修会（令和七年六月八日青葉区中央市民センター）報告

意識とは何か ―てんかん学からの考察―

講師 大槻 泰介

（麦）

人にはそれぞれ意識があるとされる。しかしこの意識とはそもそもいかなるものなのか。最近では、ロボットやAIに意識を持たせることは可能かという議論もある。筆者は長年てんかんの治療に携わってきた医師だが、この病気の最も不都合な所は、一時的に意識を失う事があるということだ。意識を失うとはどのような体験なのか。脳震盪の時の経験では、単にその間一時的に眠っていたのと変わらない。しかしてんかん発作では、発作中に意識の変容と呼ばれるさまざまな時空の感覚の変容や情動を体験することがある。ドストエフスキーは小説の中でてんかん発作における「夢幻様状態」につき生々しく描写している。それは恐怖や歓喜の体験であり、また宗教者では天啓としても現れる。

てんかん発作は脳の神経細胞の異常放電により引き起こされる現象であるが、脳のどの領域で起こるかによりさまざまな症状が惹起される。てんかん発作の解析は、ヒトの意識を司る脳の基本構造について知る手がかりを与えてくれる。

自分が何者なのかという意識は、これまで自分が生きてきた過去の記憶に基づいている。自己とは過去から未来へと流れる時間軸に沿って形成された記憶の体系なのだ。また空間的に自己は自分の身体の中にあると意識されているが、これもまた意味一つの記憶であり、自分の手、足、身体という感覚も、訓練次第で変容しうる（ラバーハンド実験など）。てんかん発作では幽体離脱を体験することがあるが、これは体の位置感覚を司る脳の領域から発作が起こるためと説明される。

自分自身という意識が消えてしまう自己融解体験は、てんかん発作などの病的な状態ばかりでなく、瞑想における無我の境地や幻覚剤の服用時にも起こりうる。これは自分に關する記憶と空間的な自己の感覚の両者が一時的に減衰することにより起こると説明される。

また人の意識は、社会の影響も強く受ける。ウクライナやガザの戦争に對する国ごとの人々の意識の差には誰しも愕然となる。なぜこれ程まで所属する社会が違ふと人々の意識が異なるのか。それはそれぞれの社会で、人々の意識の根底に共有されている記憶が根本的に異なるからなのだろう。人にはそれぞれ意識があるというのは現代社会では自明の事とされる。しかし意外にも、それは自分達が思っているほど確としたものでは無いのかもしれない。

「意識」とAI ―講演を聞いて―

島 松柏

（荒星）

「てんかん」という病気を基に、人間の「意識」について、いろいろと教えられ、考えさせられる講演だった。まずてんかんは、脳の神経細胞の異常放電によって生じ、それにより意識の喪失や全身痙攣など様々な症状を引き起こす。そのメカニズムは、脳機能の検査画像によって解明されつつあるという。そしててんかんの治療の一つに患部の手術があり、原因となる脳の一部の切除によって治療が可能であることを初めて知った。

このしばしば喪失する「意識」とは何だろうか。元々は仏教語であるが、講演では「今していることが自分でわかっている状態」という。この他辞書では「覚醒状態の時の心の状態」、「何事かを氣にとめること」、「ある意図をもつてすること」、「ある物事に對してもつていいる見解、感情、思想など」等々、きわめて多義的に用いられている（『日本国語大辞典』第三版）。

この「意識」について、とくに脳の各部分での機能という観点から、意識やその喪失という事態について図を用いられ、詳しい説明がなされた。空き時間に大槻先生にお伺いしたことがあった。それは「AIに人間と同じ意識を持たせることは可能だろうか」という疑問だった。少なくとも人間に固有の自意識や美意識を持たせるのは不可能でないか、という思いもあったからだ。すると先生は、「人間は生命とは何か、どうして出来たのかということすらわかっていない」と言われたあとで、「鉄腕アトムなら作れるかもしれない」とおっしゃった。

近年AIに俳句を作らせる試みが多く行われ、関連する著作も出版されている。確かに俳句は五音十七音十五音の語の組み合わせで出来、取り合わせ・配合・二物衝撃など、短歌や詩と比べてもAIが容易に作れる要因を持っている。だが多くのAIによる作品を見ると、形としてはまとまっているが、「何か」が足りない。別な言葉で言うところ「詩を感じないのである。そこには俳句作品を最終的に詩として統括しようとする、ヒト固有の感情や情緒、情念などの「意識」が欠如していると思われるのである。

夏季研修会句会

Ⅱ「雑詠」及び席題（鉛筆）Ⅱ

〈高得点句〉

- 10点 海馬また嘶いており髪洗う
- 8点 青嵐止みさう馬の長睫毛
- 7点 色鉛筆で描けぬ色あり二重虹
- 6点 鉛筆の記憶が夏の大樹描く
- 6点 向日葵畑色鉛筆の黄が足りぬ
- 6点 晩学の道はでこぼこ葱坊主
- 5点 神々の涙がガザの早星
- 4点 鉛筆一本貫つて帰つた運動会
- 4点 手廻しの鉛筆削り麦の風
- 4点 夏季講習「海馬」を赤鉛筆で書く
- 戦争はいらないがある薔薇にトゲ
- 鉛筆はテストの答えアマリリス
- 鉛筆をかじる子犬と夢みだし
- 着水の水輪を崩す通し鴨
- 鉛筆の力む数独水母めく
- 境なき戦前戦後けしの花
- 色鉛筆で描きし父と雲の峰
- えんぴつの転がる畳梅雨湿り
- 夏期講座鉛筆で描く海馬かな
- 蜘蛛の囀の歪んでいても美しき
- 削らなかつたままの名前入り鉛筆
- 鉛筆を耳の棟梁青葉風
- やわらかき鉛筆やわらかき心
- 墓守の肥えて名のなし金魚かな



川名まこと 日下 節子 菊池 修市 小田島 渚 平山 北舟 丸山千代子 嶺岸さとし 伊澤てつを 本木 朱実 浅沼眞規子 大久保和子 大坂 宏子 小野寺みち子 小関 桂子 坂下 遊馬 島 松柏 新藤 綾子 鈴木 三山 高橋 薫 寺田 文武 丸山みづほ 水月 りの 渡辺誠一郎

ようこそ、現俳へ。

新会員紹介
(令和7年9月現在)

大槻 壽夫 (素の会)

畑仕事終えて農道月が追う
盆入りて過疎の山あい児ら集う
社道泣いても離さぬ千歳飴

今から丁度十年前の夏頃に、名取市民講座に俳句受講募集があり、それが始まりです。その時の先生が中村孝史先生であり、大変面白く、また楽しい句会であり、一年位受講し、その後は中村先生の「素の会」へ入会して今日まで続けております。残念乍ら昨年中村先生が退き、現在嶺岸さとしさんに指導を受けております。皆さんと一緒に句会で勉強できる機会があれば嬉しく思います。その際は是非よろしくお願い致します。

松枝 栄樹 (麒麟・むじな)

短夜やラッコくるくる眠りをり
モアイ像動かしさうな南風
落語家のポスター褪せしなめこそば

中学校の国語の授業で俳句を作り、授業内で句会を体験したことが、私の俳句との出会いでした。その経験をきっかけに高校では文芸部に所属し、武田菜美先生のご指導を仰ぎながら俳句作りに励みました。大学進学後はさまざまなご縁に恵まれ、「むじな」や「麒麟」に参加し、本格的に俳句に取り組むようになりました。

松本 明子 (荒星・門・群青)

つと蝶のはなれ金糸桃満開に
まだ瓜の匂ひしてをり瓜の馬
端居してChet Baker暮るるを待つ

宴会で箸袋に俳句らしきものを書きメモした。それが荒星の句会を運営している先輩の目に留まり、句会に誘ってくれた。これが、俳句に取り組むきっかけだった。荒星の句会は主宰を置かず、自由にお互いの句を研究するような気風で、大変に勉強になっていた。また、あるバ1で俳句に限らぬ生涯の師と出会う幸運にも恵まれた。この師によって、俳句の世界に二度目の生を与えられたと思っている。

私であることの大切さ

小田桐妙女

(陸)

五十代の俳人の中から今回私が取り上げるのは、杉浦圭祐氏、田島健一氏、小津夜景氏の三名である(以後、敬称略)。

杉浦圭祐第一句集『異地』に対する宇多喜代子の跋文の話から始めたい。作家中上健次(故人)主宰の熊野大学には「俳句部」があり、参加した中上健次からは俳句用語の飛び交う通常の句会にはない句評が飛び出し、毎回ドキリとさせられたものだ、と宇多喜代子は書いている。私もそのスタイルでいきたいなと思う。そもそも、何が俳句用語なのかを知らないのだが。

改めて三名の句集を読み、ふと頭に浮かんだのが「私であることの大切さ」である。杉浦圭祐句集『異地』の「神火」の章はお燈祭りの上り子を実際に経験している彼ならではの句であるし、他の章も中上健次の世界にある路地を彷彿とさせる。「大滝を拝むところに火の匂い」「男根を携えてゆく火の祭」「御燈下りきり女に我が名呼ばれけり」。「濁りても透き通りても夏の川」は、中上健次の持つ「清濁併せ呑む」を象徴しているように思える。

田島健一句集『ただならぬぼ』。「胃に森があり花守が泣いている」。「紋黄蝶とくべつな子になるまで追う」。「視野に白鷺くちびるがふとあまい」。「双眸のきれいな鹿を持ち帰る」。「なにもない雪のみなみへつれてゆく」。田島健一の句に出会った時から続いている不思議な感覚。ことばだけを読むと分かりづらいのかもしれないが、その奥の部分まで入っていくと人間として生きることの刹那を感じる。切なく哀しく愛おしく、滑稽さもある。

小津夜景句集『花と夜盗』。「羊皮紙をめくれば臘月蝕の」。「漣が笑ふいそぎんちやくの朝」。「とびとびに絃をつまびく秋の蝶」。「手裏剣やわれに夜盲の尻がある」。「いさよひの花を祀らし反故の庭」。「盈ち虧けに花はおぼれよ殯」。「百合の骨つまめば砂となりしのみ」。ことばのセレクトが絶妙であり、遊び心を持っている。読んでいて楽しい。小津安二郎を思わせる小津夜景という名前、彼女のセンスが丸ごと好きである。「花と夜盗」の装丁も良い。

三人に限ったことでは無いが、短い詩のなかの「私」は「私」のなかに居ながら距離を保ちつつ見ている。その「私」を包んでいるのは自然であり地球であり宇宙である。私も五十代、もっと欲をもたないと思う。

— 令和新風を起こす —

三十代という風

檜野美果子

(小熊座・noi)

佐藤文香 句集『こゑは消えるのに』より

天高く我ボジティブを恥ぢにけり

無意識に刷り込まれた「ボジティブ思考が善」という風潮。空の広さを思えば、私のボジティブもちつぽけなもの。肩の力が抜ける感覚が魅力。

あらたしきもののすべてにライム絞る

挨拶は花束と似て春の森

自分自身まであらたしきものになっていくような感覚。また、ふいにかけられる言葉はブーケを手渡されるように軽やかで優しい。

黒岩徳将 句集『渦』より

歯が眩しスイトピーと言ふ人の

スイトピーの花言葉には「門出」や「優しい思い出」がある。歯に焦点が当たっているのも目を合わせてしまえば感情が溢れ出してしまいそうだからかもしれない。視点を少しずらすことで思いがより鮮明に表れる。

にこにこ辞めてゆくなり日野草

ポリーナスと仰ぐ気球のなき夜空

苦しみを隠す笑顔、希望を見出したいのに見つかからない夜空。働く者が日々抱えている閉塞感や鬱屈感を平易な言葉がより一層引き立てる。

古田秀

街棄つるやうに遠足出発す

(第十五回北斗賞受賞作品より)

笑顔の子どもたちがもう二度と帰ってこないのではないかという少しの恐怖を感じさせる。対象物の把握とそこからの飛躍が光っている。

メロン食ふからだは夜の泉なる

同

桃喰るからだの熱を吸はせつつ (第三回鈴木六林男賞受賞作品より)

どちらも果物を味わっているときの自分の身体感覚を意識している。身体端々しさを体温が感じられて清々しい気分になる。

三名の句からは「風」を感じる。既存の価値観を疑い、ふと立ち止まる。まっさらな心で物事を考える。身体感覚に集中する。それがまるで風のように、読者は穏やかな心持ちで句の世界観に浸ることができると感じるのだ。

平成一桁世代 — 口誦性と活動の持続性を基準に —

浅川 芳直

(駒草・むじな)

私は平成四年（一九九二）生まれである。便宜的に五歳上、五歳下までを同世代とすると、ざっくり平成一桁世代である。句集のある俳人を数えてみると、一番上の学年は生駒大祐・山本たくや・諏佐英莉・藤田哲史（昭62生）、一番下は小山玄紀・野名紅里（平9／10生）で、二十三名（筆者を含む）・二十五冊であった（二〇二五年九月現在）。この世代の刊行句集一覧や受賞歴はweb上にまとめたので、関心のある方はQRコードよりご覧いただきたい。

世代の傾向としては、比較的やさしげな作風の人が多い。これより下の世代となると、岩田奎、板倉ケンタら通俗を排したストイックな句集が目立つ（そもそも刊行点数が少ないが）。同世代から三人を選ぶなら、俳句をしない人にも受け入れられる、口誦性の高い句を作れる人を挙げたい。つまり、俳句としての達成と親しみやすさの両立だ。活動の持続性を加味すると、私は、福田若之（平3生）、斉藤志歩（平4生）、小野あらた（平5生）の三人に注目する。

ヒヤシンスしあわせがどうしてもいる 福田 若之『自生地』（2017）

ペプシ！ と音してあふれたす冬の星 同

十月の鳥の心の知りがたし 同

この宿のシャンプーよろし雪あかるし 同

葛餅の黄粉必ず余りけり 同

湖を船は出られず細雪 同

福田の「ヒヤシンス」の句は、東日本大震災を踏まえているが、震災詠とは違う切実さがある。斉藤の句はユーモラスでありながら、「鳥の心の知りがたし」のようなフレーズにかなしみがある。小野は「葛餅」の系統の句からトリヴィアリズムと言われるが、「湖を」のような大景の句を見ると、小さいもののへの愛情は、作者のやさしさゆえではないかと思う。



同世代を語る

丁寧言葉にし続ける

吉沢 美香
(小熊座・むじな)

青本瑞季

椿かぞへて心音ひびわれる海が

むかし火はほろみ川を書きくだす

『俳句』二〇二四年六月号「empty」より。一句目、知らず知らずのうちに壊されていくような、どうしようもなくなっているような苦しい句だ。椿の赤ささえ耳に響いてくるようだ。しかし、自分の不安定さや揺らぎに共鳴してくれる海があるようでほっとする部分もある。空想のような確かな手触りがあり、自分が見つけたものを掴み取って離さない力強さに惹かれた。

岩田奎

うしろから前へ景色や暖房車

巻尺をもつて昼寝のひと跨ぐ

句集『膚』より。一句目、吹雪で真っ白な外の景色が前に前に膨らんでいく感覚が嬉しい句だ。電車の振動からか、浮遊感もある。読み返すたびに、上五「うしろから」から、背中から伝わる暖房車の温かさもフォークラスされる。句集を通して、言葉や語順がかちつとはまっている印象を受けた。綺麗な音と一緒に鋭い感覚が頭にすんと入っていくようだった。

野城知里

くるぶしといふ名のふしぎ彼岸潮

花杓包帯解けばまたわたし

第十二回星野立子新人賞「半睡の文字」より。一句目、とぼけているようにも冷静なようにも、自分だけがこの世に取り残されて寂しいようにも見える。くるぶしを意識するうちに、彼岸潮の冷たさ、豊かに流れる海の煌めき、向こうの景色など、少しずつ広い世界に開かれていく点も魅力的だ。連作全体を通して、静かな世界に自分を再発見していく印象を受けた。

二十代の三名の共通点として、自分の体を通して外の世界や自分に触れて、自分が感じ取ったものや残しておきたいものを丁寧に言葉にして繋ぎ止めている点が深く胸に響いた。

佐藤鬼房俳句墨書展

肉筆で書くということ

鶴岡 行馬
(鷹)

「佐藤鬼房俳句墨書展」が令和七年七月十五日から二十一日まで、ふれあいエスプ塩竈で開かれた。鬼房のご令室ふじゑ夫人が今年七月に満百三歳の誕生日を迎えられるのを記念して、夫人に鬼房の俳句と書を見せたい一心で、長女の山田美穂さんが企画したものだ。

作品は、色紙十五句、小色紙十句、短冊十二句、葉書大の書が七十句余など。中で、ひとときわ目を惹いたのが六十cm×七十cmの料紙に書かれ、額に入られた次の句。

陰に生る麥尊けれ青山河

涌谷町にこの作品の句碑があるが、今回展示されたものは句碑の候補として書かれた三点のうちの一点だという。生命力溢れる書で、特に中央上部を突き破るように書かれた「麥」の字が印象的だ。他に「歸りなん春曙の胎内へ」「新月や蛸壺に目が生える頃」等のごつごつした書体、「おろかゆゑおのれを愛す桐の花」「白桃を食ふほの紅きところより」等のやさしい筆遣い、「中空に修羅を舞ひたる春の夢」(この句だけがまくり額装をしている)の伸びやかで儚さを感じるような細い筆致、等々、印刷されたものでは決して味わえない、句に応じた書の世界を堪能することができた。

見ているうちに気づいたのだが、署名の「鬼」は一画目の点がないものがほとんどであった。「角のない鬼」それが鬼房だったのだろうか。それはさておき、俳句作品をパソコン等で打っている人も最近はいるといふ私も整理するときはパソコンを使っているが、はじめからパソコンで作った俳句と肉筆で書いた俳句とではその表現が違ってくると思う。それぞれの良さもあるだろうが、できるだけリアルな句会をやる中で、肉筆で書き、肉声で話すことも忘れてはいけないと思う。



■慶祝

関根 かな 第10回小熊座賞
中村 春 第10回小熊座賞
小田島 渚 第1回小熊座新人賞
川名まこと 第1回小熊座新人賞

◆編集室から

◆新シリーズ「多羅葉」を、今年百歳を迎えられた島田静子氏にお願いした。〈聖五月美貌の猫を愛しけり〉には「猫は庭をみる針の目にゆめのやうなるいきものとなりて／葛原妙子」のような猫の高貴で優美な姿が浮かぶ。都会的で瑞々しい感性が溢れる二十句。

◆「同世代を語る―令和新風を起こす」には四名の若手俳人に自身と同じ年代で注目する三名(所属結社外)の評価点と三名の共通点を作品と共に上げていただいた。今やどこか穏やかな第二芸術論ともみえる「俳壇無風」。それに首肯するか否かより、今生まれている作品に対する確かな批評の目の存在が重要に思う。新風は起きるのではなく、起こすものではないだろうか。(小田島 渚)

photo 俳句

银杏散る表彰式の帰り道

(表紙の写真／紅葉の賀(東北大学))

菅原はなめ

発行所 宮城県現代俳句協会 令和七年十月十五日発行
発行人 渡辺誠一郎 編集部 坂下遊馬、小田島渚
事務局 千九八九―二三五一 宮城県亘理郡亘理町北新町二―一三
坂下遊馬 方

電話 〇九〇―二九八二―七三三〇
メールアドレス miyagikengh@gmail.com